一九七三年を迎えて

折原祥子

私の所で幼稚園を開園したのは、「家族みんなで力を合わせて何かをしよう」という母の提案からだったと思う。サラリーマンの父と、小学校で教えた経験のある母と、伝導所の附属幼稚園に勤めていた私。そして妹が二人いるが、ひとりは織物を専攻し、ひとりは日本画と、各自好きな事をしていた。その家族が、何かの形で協力していけるものは？　と考えた時、戦後川崎の焼け野原に立って「ここに幼稚園を始められたら……」と考えた事があるという母の考えと、私の「小さくて夢のある幼稚園で、自分の思うような方法で保育をしてみたい」という夢がはからずも一致した。そして、何のむずかしい事も考えずスタートし、偶然、土地もすぐ見つかり、不思議なほどスムーズに開園してしまったのである。

それから六年の間、家は建ち並び、ススキの野原も次々にな

開園のころ

丹沢大山連峰の見える丘の斜面の新興住宅地、四百坪ほどの土地に、本当に小さな幼稚園を建てて、六年余りになろうとしている。園が建ったころは、家が二～三軒しかなく、回りの造成地にススキが茂り、かわいい野性のスミレが咲き、田んぼには、オタマジャクシがいっぱいだった。

開園当時は、十名ほどの子どもたちとススキを飾り、おだんごを作ってお月見をしたり、夏休みには、園庭で、近所の小学生も一緒に、キャンプファイヤーを楽しんだ事など、なつかしく思い出される。その子どもたちももう今年は六年生、五年生になる。子どもたちの成長を見て、早いものだなとつくづく思うのである。

くなっていくが、自然は、まだまだ残されている。

春にはタンポポ、スミレが、庭園のすみに遠慮がちに顔を出す。子どもたちは、大切に大切に、石でかこいをつくる。ふまないように……と。

夏には、近くの神社の杉林の中から、セミの鳴く声がにぎやかに聞こえる。子どもたちの好きな、カブト虫クワガタ虫も、アゲハチョウもオニヤンマも、まだまだ見られるのはうれしいことである。

秋にはコスモスが咲きみだれ、道路にトンネルのようになり、ドングリはもちろんの事、園の近くで梨がり、くりひろい、おいもほりもでき、自然の実りを充分感じる事ができる。カマキリ、バッタも、保育室にとび込んでくる。それもみんな子どもたちにとっては友だち、そっと草原にもどしに行くようすも見られる。

冬には、丹沢が雪をかぶり、山肌がくっきり見られる。子どもたちと帰り道に、あまり美しいので立ち止まり、ながめる事がある。

家が建ち並び、都会的なふん囲気の中にも、こんなに自然が残されている事は、私たちにとって、本当に恵まれている事なのだと思う。これからも、少しでも自然が失われないようにと祈るばかりである。この様な環境の中で、三年保育から、一クラスずつ、八十名の園児が、四名の先生と共に生活している。

今までの歩み

幼児教育の道に入って、今年で十年になる私だが、年は過ぎていくものの、常にいろいろな問題にぶつかり、年々教育のむずかしさを感じるだけで、少しも進歩せず、いつも一年生の様な気持ちで過ごしている。

年長組を受持ち、子どもと接する事が一番楽しい私なのだが、時には、経営者の立場から、ある時は園長の立場から……といろいろな問題が出て来る。そのたびに、何でもぶつかって、やれるだけやってみようという気持ちで解決してきている。

私は、ある大学の先生ご夫妻が、キリスト教伝導のために開いた幼稚園を手伝い、日曜学校の子どもたちと接していた時に養われたいろいろの事が、今、どんなに役立っているかを、つくづく感じる事がある。そこは施設も貧しく、幼稚園としては、決して恵まれた状態ではなかったが、子どもたちひとりひとりに人間として接し、大切にし、何をする時も、子どもを中心に考え、先生も子どもも感謝の気持ちをもって生活していた。また、何でも工夫する事をし、ないものを作り出していく事も学

んだ。もし、設備の整った大きな園で、自分の受持ちの子ども中心に考え、保育していればいいような園が、私の基礎の場であったなら、決して、今、幼稚園を進めて行く事などできなかったと思うし、私にその様な力もなかったといつも思っている。

自分の思った事をしてみたいと思い、建てた園であるが、理想的な幼稚園てどんなのかしら?……と考えれば考えるほどむずかしい。施設の事、内容の事、いずれもこれでいいという型がないような気もする。自分たちに与えられた環境、状態の中で、力いっぱい努力する事が一番大切な様に思う。中心は子どもなのである。ひとりひとりの子どもが楽しく生活できる場である事、そのために、家庭でもできる努力をし、保育者と力を合わせて、初めて子どもに良いものが与えられる。そんな幼稚園でありたいと思う。

この様に小規模な園であるから、卒業しても園とのつながりが密接である。毎週一度は図書を借りに来る子、学校のようすを報告に来る子、毎朝、声をかけて学校に行くのが日課になっている子、運動会の時など、「リレーの選手に選ばれたから、絶対応援に来てね」とさそいに来る子どもたちである。お母さま方も、小学校に行ってからのようすを知らせに来てくださる。

「あんなにメソメソしていた子が、入学式の次の日、歌を歌える人といわれて、手をあげて、自信満々で歌ったんだそうですよ」などうれしいニュースがたくさん聞けるのである。

昨年は、卒業生の高学年を十五名ほどつれて、丹沢にキャンプに出掛けた。自然の中で、のびのびと過ごす姿の中に、幼稚園時代のひとりひとりの姿を思い浮かべた。

おしゃべりだった子は相変らずおしゃべりで、ユーモアのある子も、てれやの子も、少しも変わっていない。しかし、それぞれの子どもが素直でのびのびと、自分のもっている物を表に出している姿を見て、本当にうれしく思った。今年も行くのだと、今からはりきっている。幼稚園にいる二年、または三年だけのつきあいでなく、卒業しても幼稚園を思い出してくれる様な、家庭的な園にしていきたいと思う。

一九七三年を迎えて、あらためて思う

子どもたちには、与えられた物ばかりでなく、自分で考え工夫し、作り出していく事の楽しさを知ってほしいと思う。

また、何か問題にぶつかった時、勇気をもって立ち向かう力も持ってほしいと思う。

どんな子どもでも、ひとりひとりを見ると何かしらいいものを必ずもっている。思いやりの深い子、たくましい子、……

やさしい気持ちの子、めんどうみのいい子、本の好きな子、何かを作る事の好きな子など、いろいろである。どんなに小さな芽でも、いいものを見つけて、のばして行く事が、幼児教育にとって大切な事ではないかと思う。子どもたちの持っているこの小さな芽は、今までの生活の中から、自然に育って来たもので、口で教えられたものではないのである。

最近特に感じるのは、子どものまわりにいる大人の人間性の大切さである。両親はもちろんの事であるが、保育者自身の人間性がどんなに子どもに影響するか。だからこそ、子どもに教えるのではなく、一緒に学んでいく事が大切なのではないだろうか。保育者も人間として、常に学ぶ気持ちを持つ事、そして、自分自身の幅を広げ、深さを増して行く事に努力をし、子どもたちと生活して行けば、子どもたちに少しでも、いいものを与えられると思う。また、子どもたちの中から保育者が学んで行く事も多いと思う。やさしさ、思いやりなど、「こんなわんぱく坊主に、こんなやさしい気持ちがあるなんて……。一生変わらず持ち続けてね」と思う様な場面がいくらでもある。そんな時、自分自身を反省するのである。

子どもと一緒に考え、努力し、共に喜べる様な保育をこれからもしていきたいと思う。保育者として、こんな方法でいいのかしら？　と迷う事は常であるが、ある時には、自信をもって事にぶつかり、ある時は素直に反省して行く事も大切ではないだろうか。

幸い私のそばには、いろいろ注意してくれる、畑ちがいの者がいる。

「幼稚園の先生って、まじめ過ぎるほどまじめな人が多い様だけれど、考え方が狭いみたい」「何でも経験したり、見たりして、物を広く見られる目を養う必要がある」などと何かにつけて教えてくれる。そういう時も、自分のあり方を考えさせられる。

これからも、もっともっと大きな問題にぶつかる事もあるだろう。まだ気づいていない問題もたくさんあると思う。努力を惜しまずに、今年もがんばって行きたい!!　少しでも進歩のある事を祈って。

（松ケ丘幼児園）